

平成 28 年度ひまわりパーク上牟田事業報告

平成 28 年度は、昨年から引き継いだ生活介護・就労継続支援事業 B 型・就労継続支援事業 A 型を実施しました。育成会が緊急に動物園を担当することになり、就労継続支援事業 A 型の移動班は、従業員や支援員の異動等で慌ただしい始まりとなりました。さらに、正規職員の配置が遅れ、新しい従業員への支援体制が取れず、どんたく等のイベント繁忙期には施設を中心に事務局からも応援をいただきながら対応していきました。6 月に正規職員が配置されて、流れがスムーズになりました。

利用者総数はスタート時点で 30 名、年度途中の退所や異動等変動はいくつかありましたが、3 月末で在籍は 31 名となっております。

就労継続支援事業 A 型を取り巻く環境が年々厳しくなってきました。今まで優先的に配慮されて育成会で対応していた清掃業務が、予算が厳しくなるとともに入札による獲得の流れになってきました。結果として、100 年記念公園は入札できませんでした。就労継続支援事業 A 型の今後に関して、早急な対応が求められています。

就労継続支援事業 B 型の簡易作業は新規に複数の仕事が飛び込んできて、結婚式用ナフキンの埃取りと明太用の袋折りは定着しました。ホテルのカードキーケース作業は、年度末から年度初めの繁忙期に受注が集中しましたが、かなりの数をこなすことが出来ました。市役所等の封入封緘作業・DM 作業・シールはがし・ストールの点検作業等可能な限り仕事に取り組みました。

食品作業の「ポテトチップス」は、新しい味を模索しながらスパイス味を開発しました。福岡市のときめきセレクションで金賞を受賞したという付加価値もあり、販売経路も拡大し、売り上げも確実に向上してきました。

着実に仕事が入るようになり、利用者に働く意識も強くなってきました。後半は、仕事に追われる状況も出てきましたが、利用者全員で仕事に集中し、確実に納品することが出来ました。仕事も早くなってきました。結果として、工賃を月平均で 3,000 円程向上させることが出来ました。利用者の笑顔も多くなりました。その半面、職員のオーバーワークも大きな課題となりました。職員の健康維持も考えなければなりません。

さらに、利用者の高齢化や様々な事情で B 型の利用を変更せざるを得ない利用者が複数出てきたため、就労継続支援事業 B 型の利用者が減少しています。この課題をどのようにしていくかが次年度の大きな課題である。

今年度は、利用者並びに保護者の高齢化に伴う対応が大きな課題となりました。グループホームへの緊急入居対応や保護者亡き後の施設入所等、支援センターとの連携が多くなりました。保護者の実情を踏まえ、グループホーム対応

を検討している利用者も多くなっています。利用者・保護者のニーズに応えるため、計画相談事業所や他機関、事業所等と連携を取りながら支援に努めました。

具体的な事業内容は次の通りです。

1 利用者の状況

平成29年3月31日

項目	内容
定員（実利用）	36名（31名）
男女別利用者	男性16名 女性15名
平均年齢	47,1歳（男性：46,6歳 女性：47,7歳）
支援区分	なし（4名） 区分1（1名） 区分2（7名） 区分3（7名） 区分4（11名） 区分5（1名）

2 事業別の利用者数及び職員数

平成29年3月31日

事業名	定員	男性	女性	合計	支援員数
生活介護	6	2	4	6	1
就労継続支援B型	20	10	5	15	4
就労継続支援A型	10	4	6	10	3
合計	36	16	15	31	8

3 事業別活動状況

(1) 生活介護

- ・活動も定着し、利用者自身も先の見通しを持ちながら、落ち着いた動きが出来てきた。年度途中から、自分たちの得意な活動である「清掃」を採り入れた。主に、地域清掃として施設周辺の清掃活動に取り組んだ。清掃道具を持つと表情も変わり、意欲的に取り組むことが出来た。得意な事を喚起させることで、他の活動への意欲を引き出すことが出来た。
- ・カレンダー作りは画用紙への製作から、壁を利用した大きなものへと変化させたりして利用者のやる気を引き出す工夫を重ねた。また、季節の飾り

- 作りにも取り組んだ。玄関の壁面環境づくりにも取り組んだ。
- ・運動不足解消として、毎月博多フレンドホームでの「健美操」に参加した。地域清掃や公園散策・教材の買い物・図書館利用等体を動かすように活動を工夫した。
 - ・さをり織りにも取り組んだ。集中して作品を製作することが出来た。
 - ・B型の作業が一気に増加し、出来る活動は一緒に取り組んだ。ポテチ袋へのラベル貼り・名刺の切り取り・封入封緘作業（印押しや紙折り封入等）・化粧品のシール取り・ホテルのカードキーケースの数え等多くの活動に取り組む、働く意識の再確認が出来た。この取り組みを通して、B型でも十分に活動できる利用者の姿も見えてきた。
 - ・利用者の中には、障がいの特性や高齢化に伴い、急激退行等で支援が必要になってきた方も出てきました。表情が消え・発語が消え・動きが停滞し・視力が落ち、これまでとは違う症状が出てきた。一人ひとりが見せる症状は異なりますが、支援が一気に増加してきました。今までは出来ていたことが出来なくなり、保護者の不安も増大してきました。食事、排泄、移動等あらゆる場面での支援について、担当職員だけでなく全職員で情報を共有し、また保護者との連絡を密にして支援に取り組みました。
 - ・B型の利用者の中に本当に生活介護が必要な方も出てきました。今後の対応が早急に求められています。

(2) 就労継続支援 B 型

- ・昨年からの引き続きで、業者からの委託を受けての樹脂版印刷（シルクスクリーン）と自主製品としてポテトチップス作り、他にアルミ缶回収作業や生産者から直接取り寄せた鹿児島茶の販売等を行いました。
- ・途中から、ホテルのカードキーケース作り・ストールの埃取りと袋詰め・結婚式用ナフキンの埃取り・DM作業・化粧品のシール取り・封入封緘作業等の委託作業が一気に増えました。委託が重なった時には納品に追われる状況が続きました。それぞれの仕事を誠実にこなしてきたので、現状でもつながっています。
- ・結婚式ナフキンの埃取りは最初3ケース（1ケース300枚）から始まり、今では8ケースの週2回納品で16ケースをこなしています。仕事は定着し、繁忙期は12ケースをこなすまでに、作業技術は向上しました。
- ・ホテルのカードキーケース作りは、年度末と年度初めの繁忙期に集中して入ってきます。年間通しての委託に繋がれば確実な収入になります。丁寧な仕事と、緊急対応に応えながら信頼を獲得できるように取り組んでいる所です。

- ・樹脂版印刷（シルクスクリーン）については、昨年度より印刷量も増加し、収益は上がりました。作業の見直しを考えていく必要を感じています。
- ・食品作業のポテトチップスは、ときめきセレクション金賞受賞を看板に販路拡大に取り組みました。また、新しい味の製品作りにも取り組みました。夏場に向けてスパイス味を開発し販売しました。当社は好調な売れ行きでしたが、冬場は伸び悩みました。さらに研究する必要があります。“油で揚げていないヘルシーなチップス”のイメージが少しずつ浸透し、販売数も拡大してきました。包装へのクレームが入り、自分たちの甘さを見つめ直し包装の在り方をみんなで工夫しました。デザインも変えたことも販売拡大に繋がったと感じています。クレームに対し、逆風を如何にプラスに変えていくかという発想は、支援員全体の大きな財産になりました。
- ・飛び込みの仕事もいくつかありましたが、年間通して着実に仕事を重ねることが出来ました。結果として、工賃を向上させることが出来ました。
- ・平均工賃月額は、昨年の実績から 2,000 円以上積み上げることが出来、7,000円になりました。

（3）就労継続支援 A 型

- ・27 年度 4 月から施設外就労と施設内就労に分かれて作業を開始しました。利用者（従業員）は当初、それぞれ 6 名と 2 名でスタートしましたが、2 名が途中で異動してきたので、10 名での活動となりました。支援員も 1 名不足の状態がありましたが、6 月から正式に配置され安定した活動になりました。

施設外就労は市の行政機関や他の福祉団体からの業務委託契約による市内の公園清掃作業を行っています。清掃とともに、報告内容の正確さを求められるようになりました。職員がきちんと対応し、信頼を得ることが出来ています。

施設内就労は印刷（シルクスクリーン）を主な作業として取り組もうとしましたが、作業の難しさがあり、現在は明太子用袋折りに取り組んでいます。しわが付かないように二重織りで、折りの深さも長さが決まっており、神経を使います。どうにか、月に 5000 枚が定着しました。業者からは数の増加を迫られていますが、一人ひとりの作業量が少し向上し、増加の可能性は見えてきています。

他にも簡易作業や公園清掃も行っています。ノルマを考えさせたり、早出や残業などを通して、利用者には A 型事業は就労の場であるということを常に意識させて、作業に取り組ませています。

施設外就労メンバーは毎月 2 回、上牟田で個別支援計画のモニタリングを

行います。その時に、身だしなみや持ち物等に関して自己点検させたり、それぞれの働く課題を明らかにして、支援を継続しています。

4 余暇支援

- ・休日の充実のため、毎月1回～2回の余暇支援を実施しました。今年度もさんさんプラザから講師を派遣していただき、運動不足解消と健康の維持のため軽運動とレクリエーションに取り組みました。また、博多フレンドからスタッフを講師として派遣していただき、創作活動や簡単な料理作りなどを行いました。

それ以外は、利用者の楽しめる内容を工夫して取り組みました。支援者の思いだけでなく、利用者の思いが中心に活かされるように、アンケートを実施したりして利用者の声を聴きました。また、施設内での活動が中心だったので、博多フレンドの秋祭りに参加するなど、外に出る活動も入れてみました。毎回15名から18名程の参加があります。これまで全く参加しなかった利用者が後半は毎回参加するようになりました。次年度は更に内容を充実させながら、利用者目線で取り組んでいきたいと思えます。

5 健康支援

- ・嘱託医による健康診断を年2回（6月と11月）実施しております。検診時、日常気になっている利用者の状況を相談して、嘱託医の診断を家庭につなげて検診に結び付かせるように取り組んでいます。利用者の高齢化に伴い、健康支援の必要性が重たくなってきています。

看護師による血圧や脈拍、腹囲等の測定は、結果をその都度各家庭に報告しています。毎月の結果をグラフで分かりやすくして、報告しています。保護者を交えた面談の時には健康状態で気になるところを伝え、将来の健康を見据えた家庭生活を送ることをアドバイスしています。

- ・今年度は、家庭内での心停止による入院がありました。適切な対応で後遺症が全く残らなくて、ペースメーカーを入れる手術で対応しています。
- ・施設内での顛倒で肩を怪我された利用者が出ました。安全確認や環境整備の必要性を感じました。
- ・利用者の高齢化に伴い、意思の判断を聞きながら対応すべき内容が増加してきました。可能な限り職員も診察に同行して、主治医から話を聞けるように取り組んでいます。

6 防災管理

- ・避難行動の定着を図り、防災に関する意識を高めてもらうため、1年に2

回、避難訓練を実施しました。1回目は火災避難訓練で2回目は地震対応の避難訓練を行いました。熊本地震の緊急サイレンで利用者が過敏になっており、配慮が必要な利用者もいました。津波による避難も考えていく必要があると考えています。

津久井やまゆり園の事件を受けて、校区の交番に挨拶に行き、連携を深める取り組みを行いました。また、不審者が来た場合の対応を職員で確認し、利用者にも避難の在り方を教えました。

今後も防災訓練の継続、定期的な建物の点検等を行い安全対策に努めます。

7 職員研修

- ・ 県や市、社会福祉協議会主催の研修の他に、民間団体や博多区内の研修に参加し、職員の資質向上とネットワークづくりに取り組みました。

基本的には、日常の利用者支援に関して様々な場面で研修を重ねました。作業に関して「できない」ではなく、「できる」ためにはどうすればよいのか。具体的な支援の工夫を指導しました。また、自分で行動できるようにするために、解りやすい環境づくりを行いました。支援のあり方も、「言葉支援」から「視覚支援」へと利用者目線での対応を工夫しました。

利用者理解に向けても、障がい特性を始め様々な観点から施設内での研修を深めました。結果、利用計画をはじめとする文章は利用者目線の書き方になりました。

支援道具を工夫することも当たり前になり、職員の意識も大きく変わったと実感しました。

8 地域交流

- ・ 4月に上牟田3丁目の役員総会を始めて、施設で実施しました。

9月には、地域の清掃活動に利用者と職員全員で参加し、地域との交流をしました。この取り組みをきっかけに、地域清掃として、施設周りの清掃活動にも取り組みが広がりました。

8月の校区夏祭りは大雨で参加できず。

10月の校区の運動会には、来年より校区の一員として参加する方向で話を進めた。11月の校区の防災訓練には、職員2名も参加。次年度は利用者参加も考える。

1月には、校区や町内の役員、民生委員、苦情解決第三者委員の方々を招いて第3回地域懇談会を実施しました。初めてプロジェクターで映像を映しながら、上牟田の具体的な活動を説明した。これまでの懇談会では、上牟田の中身を知らせることもなかったようで、「初めてよく解った」と理

解が進んだ。話はかなり打ち解けて進んだ。

また地域の集まりの際、事業所の場所提供が出来るようになり、地域との関わりも進んだ。ボランティアの話まで出てくるようになってきた。

- ・南区や城南区の特別支援学校や博多区近郊の見学希望者を積極的に受け入れました。なかなか利用にはつながりませんでした。
- ・介護体験、専門学校での体験実習等を受け入れ、お互いの情報交換、事業所を理解してもらう機会となりました。

9 苦情対応

- ・保護者との距離が遠く感じたので、上牟田通信を発行した。1号から14号まで出すことが出来た。保護者からは好評であった。また、保護者会を始めて施設で実施し、施設内の見学もしていただいた。施設等に関する苦情はなく、こちらからの要望にも耳を傾けてくれるようになった。

10 その他

- ・10月にバスハイクを行い、武雄の宇宙科学館に行きました。希望地は、利用者の意見を聞き、利用者に決めてもらいました。地域の協力でバスを駐車させていただいた。